

一葉恋慕

多谷昇太

(二) お春の一生

「おや、お島さん、お帰りかえ。このたびは御秋霜さんしたねえ。おつかさんもこれで御昇天されたわね」銘酒屋のやりて婆お蔭がほとんど愛想程度の口ぶりで弔い帰りのお島をなぐさめる。「はい、どうも。このたびは……やつれ切った表情でお島が返すのに「(葬式)組の者たちに余計な心付けなどしなかつたらうね。とうに女将さんが払っているんだからね。あんたのことだからおつかさんへの思い入れのあまり……」「ふふ、心付けしようにもお足がござんせん」そう放心気に云うお島は年の頃十七、八。背はふつうよりも高く目鼻立ちはいかにも日本人離れしている。こころなしか髪のも茶色がかっている。いたって異国情緒のある娘である。しかしその鬢もほつれ毛も普段から手入れをしていないのか、だらしないく伸びたままで、だいいち結った鬘からしてその年令に、また場所に似つかわしくない丸鬘であつた。

母親の埋葬だというのに羽織ひとつない着流し姿。奉公先の下働き女が仕事の合い間にちよつと前掛けをはずしただけのような、粗末ないでたちがなるともあわれである。開港以来このかた南蛮人への恐れと偏見も薄れて来、市井の人々、就中男どもの目にもこの手の目鼻立ち、すなわち欧米婦人への美意識が徐々に生まれ始めていた。まして身体付きとなると日本人女性の比ではなく、好色漢ならずともつい視線を送ってしまうようなお島の身体の均整のよさである。云わずもがな、お島は日本人の母親とアメリカ人の父親の間に生まれた間の子であつた。横浜で羅紗緋を稼業にしていた母親のお春が身ごもつた子であり、現地妻の感覚でしかなかつた父親が日本での赴任の用を終えると妻子を残してさつさと帰国してしまい、子持ちとなつたお春は羅紗緋への蔑視もあつて遊郭に勤めることもままならなくなつてしまつた。その挙句以前稼業とは似ても似つかない、横浜慰留地におけるお茶場(※欧米の事業家たちが慰留地に建てた製茶再生工場の呼び名。多くの日本婦人たちがここで女工として働いていた)で再生茶女工として働くに至つたのである。

朝の三時に起きては幼いお島を背に負ぶつて横浜

公園に向かい、そこに来る仕事士のもとへと他の女たちとあらそつては駆け寄り、再生茶女工の日雇いの仕事に就くのが毎日だった。日銭は天保銭で13銭から16銭、朝7時から夕方5時までの仕事で、その間ずつと室温40度を優に超えるだろう、茶塵がもうもうと立ち上る劣悪な作業棟の環境の中で、百人以上の他の女工たちに混じつて働かねばならなかった。直径60〜70cm、高さ70cmくらいの、熱い湯が充たされた鉄釜に手を入れては原茶を攪拌するのである。中腰で一日中立つたままの仕事で、少しでも手を抜けば容赦なく中国人現場監督の叱責の音が飛んで来る。汗びっしょりとなり終業時には手と云わず顔と云わず肌が青茶色に染まってしまう。女性としては比較的高額だった日銭が得られるのでなかったらとてもやれない仕事だった。そのみならずまだ三才でしかないお島を二時間後の九時になるまでは背に負ぶったままで働かねばならない。腰への負担もあつたが何よりそのお島が心配だった。九時になれば一人のアメリカのご婦人が茶場にやつて来て、お島のような幼子を始め子供たちをあずかつてくださったのだ。そのまま終業時まで面倒をみてくださる。間の子のお島を特に可愛がつてもくれお春にと

つては神様とも拝みたいご婦人だった。名をバラ夫人と云い、一八七三年にアメリカの外国伝道協会から派遣されて横浜の同国ミッションホームで教師として働いていたのを、夫J・Cバラとの再婚を機に所属もアメリカ長老派に移り、かねてから目に余つていたお茶場の子供たちの為に学校(兼保育園兼託児所)を造設したのであった。室温四十度を越えるだろう作業所内であつては幼児にはむごすぎる。背中のお島が気になつて仕方がなかった。しかしその一目で間の子と知れる背中のお島を見ては、他の女工たちの作業中の悪口まで聞かされる。

「あれ見なよ、あの茶色い髪の子。あの女、羅紗緬だあね」

「羅紗緬なんぞであるもんかね。おおかたチャブ屋の飯盛り女あたりが、毛唐に身ごまされたんだらうよ」しかししようやく九時となり中国人監督に手で合図を送る。作業釜から一時離れてバラ夫人のもとに連れて行くのだが「こら、チャブ屋、はよ戻れよ。たいたい(大体)コブ連れて来るな」と中国語訛りで大声で嫌味を云われる。女工たちがいつせいに笑う。しかしむずがって泣くこともない、母親の手付きを無邪気に真似しては背中で微笑んでいるお島の

ためにと、お春は唇を噛んで毎日を堪えていた。もとは武州の零細農家の娘で困窮した両親が村に来た女衞屋に、横浜慰留地における外人専門の遊女として売り渡したのである。零細農家や部落民の娘たちをこのように、慰留地での慰安所設置を求める外国列強の御面々へ売てようと、明治政府自体が画策したこと、そこにはひがみに近い、かつての攘夷思想が介在していた。すなわち敵わぬ列強へ差し出した人身御供と云うもので、実はこれとまったく同じことが約百年後の終戦時において、連合国軍兵士らへの慰安所設置という事態で繰り返されている。当時に曰く「進駐軍から日本人女性の貞操を守るため」だそうだが、ではこれら零細農家や部落の娘たちは日本人ではないのか？はたしてそのような彼女たちの置かれた立場は推して余りあるが、そののみならず、彼女たちにはさらに世間の白い目という冷嘲熱罵が課されていた。この明治時代の「羅紗緬、チャブ屋」、また終戦時における「パンパン」呼ばわりなどは、同苦同悲を忘れ去った世間一般の、就中、なさない、男たちの無明というものである。鎖国で立ち遅れた日本の興国の、その礎となった再生茶女工や生糸女工たちとも合わせ、また昨今のDVとも

合わせて、日本人男性らのフェミニズム軽視は遺伝子レベルになつていると云う他はない。

そのようなフェミニズムや人権などということを知るべくも、思うべくもないお春は、しかしそれゆえに人から受ける恩義の有り難味というものを人一倍知る女だった。両手をひろげてにこやかに迎えてくれるバラ夫人の前で深々と頭をさげる。自国の男の非道をもよく理解してくれ、お島のみならず自分をも慈しんでくれる、神様のような方。その夫人の前で突然、なんの脈路もなく、一瞬間だけいと同性のような、未来における成長したお島の手を取って抱いてくれるバラ夫人の姿が目には浮かぶ。さらにはいまだ見ぬ、いったい誰なのだろう、形のいい三日月眉をした目元すずしい女性の姿も目に浮かんだ。わけのわからぬしかし心地よい幻影に癒されてお春は、お島を託したあと、いま一度夫人にお辞儀をしてから熱湯たぎるお茶場へと戻って行った。

さてそのような何の知識も技術も持たなかつたお春は、4月から10月までを再生茶女工として（再生茶業は季節業だった）、それ以外を船底の錆を落とす俗に云うカンカン虫などをして日雇いの月日を過すこととなる。しかし聞きしにまさる再生茶業の劣悪

な環境がたたり（横浜、神戸など再生茶工場でコレラがたびたび発生したとの史実あり）身体に異変を覚えたお春は、ついにこのような肉体労働の生活をあきらめざるを得なくなる。白眼視されたかつての自分を払拭しようと、また娘のお島を同じ目に遭わせたくないという一心でがんばって来たのだが、もはやがんばり切れなくなってしまったのだ。コレラか、何なのか、とにかく急激に体力を失墜させたお春は、病床に着くことはなかったがその後の短からぬ期間を、貯めこんだお金ばかりを頼りに、無為徒食に過ごさざるを得ないこととなる。尋常小学校まではなんとかお島を通させたものの、その上の高等小学校など思うべくもない。いつの間にかお島は12才になっていた。花も恥じらう最良の時期をその大柄な身体つきにそぐわぬ、いかにも引つ込み思案な娘となっていた。そこにいたる在り様は平成の現在まで綿々と続くこの国のイジメ、すなわち少しでも毛色の違う者への排斥の実態を見れば自ずから明らかであったろう。しかしそれでもお島はかつて八、九才頃まで母に連れられて通ったお茶場を懐かしんでは、母に代わってこんどは自分がそこで働きたいと、おつかさんを楽にしてあげたいと、お春を泣か

せるようなことを云うのだった。しかし今の自分の有り様を見ればお春はにべもない。決して肯じ得ないことではしかなかった。とは云えこのままでは二人そろって此処三吉町（当時の日雇い労働者の街）の下宿先からさえも放り出されかねない。この衰えた身体でも働ける場所はなにかと伝手を尋ねて町内を散策する折、偶然遊女時代のかつての雇い主と邂逅した。聞けば今は東京府の下町で銘酒屋を経営しているのだと云う。お春が娘ともども身の振り方に困っていることを有体に云うと、男は娘の年頃を聞いた上で「そいつはちよいどいい。店の下働きでよかつたらいつでも来ねえ。世話をするから」といともた易く請け合う。銘酒屋が売春を兼ねた所であるということも知らずに、また芸妓時代に身受け時の借金返済だの衣装代だの、果ては法定以上の鑑札代などを請求しては、ほとんどろくな給料を払わなかった男のかつての所業を思えば、痛く遑巡しないでもなかつたがお春には是非もなかつた。家財道具一切を処分しては風呂敷ひとつの荷に変えて、お島と手に手を取って東京府は丸山福山町へと男を尋ねて行ったのだった。始めて東京へ行けると、また近所のイジメの悪童たちから逃れられると、お島

は当初ひどく喜んだものだった。ところが着いてみれば場所は本郷台地の崖下に開けた陰湿な新開地で、崖上の砲兵工廠で働く職工たちなどを売春も含めて相手にする、虚飾な看板で飾られた、安っぽい銘酒屋の立ち並ぶ一画でしかなかった。

「しまった、これは神奈川の飯盛り屋だ！」とお春はすぐに直感したがいまさら横浜には帰れない。店の奥にあてがわれた三畳一間の部屋で、この先のお島の不憫を思ってはこれを抱きしめ、自分の迂闊さ情けなさを何度も謝っては、ただ涙するしかなかったのだった。

さても…これ以降の、お春の葬儀にいたるまでの経緯を記すことは、さすがに筆者のよく能うるところではない…。

(続く)



銘酒屋のイメージ「これが私の人生か」(にぎりえより)